

## 故・塚原已成君のこと

3年D組 松代洋一

若い頃には、誰しも、友人の誰かに自分を越える資質、才能を認めて密かな畏敬の念を抱くことがあるだろう。私の場合、その友人が塚原已成君だった。

当時渋谷に住んでいた私は、戸山高校を受験することになって、新制鉢山中学では六クラスから一クラス一名ずつ受かった。もっとも一人は「君たちはまた大学の受験勉強をするのか？」と慶応高校に進んだから実際には五人である。

### 進学校の一年生

たから入学時に担任の先生から「将来は何になる」と問われて答えあぐねていると「君は八十番で入って東大を目指すんだらう？」と言われて驚いた。進学校とはそういうものだったのだ。ただし級友は個性溢れる連中が多かった。昼休みにヤーハヴェ、ヤーハヴェと賛美歌を歌う人、ジャボリジャンボリーと歌うボーイスカウト。横笛を吹いて最後にチャルメラを真似る者、これが一年生の記憶で、二年生以降は何も覚えていない。みな一律に受験生になってしまい、「昨日はユース・コンパニオンを何ページ読んだ」というような会話ばかりになっていた。

朝礼で壇上に上がった男が「例えば読め、徳富蘆花の『思い出の記』を！」と演説したことがあった。私も民友社の大正五年六十三版でこの本を愛読していたから彼の言いたいことは実によくわかった。とはいうものの、いま書棚から取り出してみても感銘を受けた箇所がもう探し出せない。

ヘッセの『車輪の下』を薦めてくれた級友もいた。私は読んでいないのに読んだ振りをしたが、級友はそれを見抜いて是非読むように薦めてくれたのだ。

### 通学での読書

数学の天才と見なされていた井上久遠君が、私が通学の電車で岩波文庫の森鷗外『即興詩人』を読んでいたのを見て、「君は文語文が読めるのか、それならこれを読んでみないか」と貸してくれたのがドーソンの『蒙古史』だった。強烈な内容に一気に上巻を読んで下巻も借りた。

菊池寛がこれを読んで「随分殺すんだねえ」と暗い顔をしたと小林秀雄が書いている。この本は読んでおいて良かったと今でも思っている。「ホモ・ネカンス（殺す人）」を腹中に収めて初めて人間を論じることができる。

自分に対する掣肘を望まないジンギスカンがわざわざ耶律楚材を傍らに置いたのも、毛沢東と周恩来を思わせて面白い。

二年生の時には西田幾多郎の『善の研究』を読んで、「内面的欲求」の一語が白紙のような頭にカンカンと入ってきた。だから以後は内面的欲求を感じない物事には背を向けるようになった。これは一途に若気の至りだったと思う。のちにマックス・シュティルナーの『唯一者とその所有』にも感心したが、早稲田に入ってから志波一富先生に言下に「あれは若気の至りだ」と言われてまさにその通りだと膝を打ったのを思い出す。

また阿部次郎の『三太郎の日記』は少しも面白くなかったが、巻末の年譜に「実行不可能の勉強計画を立てる」とあったのが妙に気に入って、自分でも形式論理学から始まる計画を試て、白波瀨輝夫君に見せたけれど、今考えると、その後の人生はその計画の延々たる実践だったように思えてならない。

### 倉田百三

千島淳爾君には倉田百三を教わった。『出家とその弟子』は少しも面白くなかったが、出版社に入ってすぐ、東大駒場の先生からいまだに一年生が読んでいと聞いて実に驚いた。村上春樹の『ノルウェイの森』が出るまでの間、『出家とその弟子』があまりにも長く若者の恋愛読本だったのだ。『絶対的生活』も薦められたが、内容は全く覚えておらず文庫本も書棚に見当たらない。あるとき教室で千島君が嘔吐したが、「あの絶対的生活が祟ったな」と思ったくらいだった。早稲田で再会した時は言葉の定義論を扱った卒論を見せられ、卒業後、恵比寿あたりでばったり出会ったときは、小型のシソーラスを見せられて「ここに世界のすべてがある」と言われたが、すでに二人の言語観は全く違っていたように思う。

### 言葉というもの

高校一年生のとき、国語の教科書で枕草子を読んでいたが、塚原君が立って、「たしかに瓜に書きたる稚児の顔はいとおかし、に違いないけれど、どうもそれだけでは物足りません」と発言しかけた。すると先生はたちまち理解し、発言を遮って、すぐさまテキストを徒然草に替えてくれた。

紫式部はうらめしいという気持ちを表す「うらめし」と、どことなくうらめしい「ものうらめし」を使い分け、そのように見受けられるという「うらめしげ」に対しても、どことなくうらめしそうに見える「ものうらめしげなり」を用いているという（大野晋『日本語をさかのぼる』）。ここには原意を和らげ、薄める繊細な心遣いがみられるが、同じ大宮人でも清少納言の枕草子には「もの」を付して弱める表現がほとんどなく、「いと」や「いみじう」を付けた「いとをかし」「いとおそろし」「いみじうをかし」「いみじう笑い給ふ、褒め給ふ」のたぐいが非常に多い。「いと」は岩波古語辞典によれば「いた（甚だ）」の意で頂点を意味するイタの母音が変じたもの、旧説では安斎随筆に「いちさき（最前）」「いちあと（最後）」における「いち」とおなじく「最も」の意とされているが、いずれにせよ強調の最たるものでその多用は「いとさあらぬ所（ごくなんでもない所）」にまで及んでいるが、これはひとえに著者の若さによる。実年齢ではない、「瓜に描きたる児の顔」を素直に「うつくし（かわいい）」と書く心を若いと見る。見るもの聞くものすべてが新鮮な才媛と、心の襞、隈を見極めた臍たけた人とで違う言葉が選ばれて当然である。

一方江戸っ子は「二つに折る」というだけでは思いが表しきれず、「へし折る」と言い、さらに「押しへし折る」と重ねてここに「真つぱたつにおつべしよれた」という表現が生まれる。これは上方と江戸の違いではなく、大宮人と職人の違いである。言葉は記号ではない。こうした語感を無視して言葉を語ることは出来ない。

それはともかく、爾来徒然草は私の愛読書となって、少なくとも二回は通読している。「智恵出でては偽りあり。才能は煩惱の増長せるなり」は元好問の詩にある「飢腸は奇策を生む」と合わせて自著の執筆を助けてくれた。

## 成城のお宅で

その塚原已成君の成城のお宅に伺ったことがあるが、お父上は評判の名医で、母上はロマン・ロランの愛読者、壁面一杯の書棚は洋書で埋め尽くされていた。床には黒板と白墨が置かれていて、これはほとんどヴァレリーではないか、数式を書くための用具だったろう。「数学は非人間的」と言う君には似合わないなと思った。数学は中学最後の試験で、自宅の病床で一人教科書を読んだだけの私一人 100 点を取っていたのだ。先生が点数を読み上げるのを校庭の窓下で聞いて知り、各クラスのトップとも答えを照合してそれが分かった。

君の見解に感化されて数学をやめてしまったのは軽率だったと後に後悔をしたが、もとより間に合うはずもなかった。

落語の話になると塚原已成君は当然ながら桂文楽、「あれで持ち種が三十もあるんですかね。とにかく細部まで気に入らないと絶対高座に掛けないんです」と賛嘆する。持ち種三十はその後も変わらなかったようだ。私は断然古今亭志ん生。漢詩は塚原已成君が杜甫、私は断然李白で、これだけは彼の影響を全く受けなかった。

## 戦後映画の全盛期

この年は小津安二郎の『東京物語』があり、チャップリンの『ライムライト』が封切られた。ともにすばらしい映画で、東京物語は、笠智衆と東山千栄子の魅力、ほとんどパンしないカメラワークに塚原君とともに興奮した。杉村春子が兄の家から帰ろうとして一旦戻りかけ、懐に右手を当ててまた引き返して辞去するシーンは「兄さん、お香典いくら包む？」と訊こうとして医者兄と髪結いの自分では同じ額は無理だと気づく思い入れだろう。医者兄の息子の塚原君がどう感じたか訊くのを忘れた。

ライムライトでは heart and mind, what an enigma! のせりふが気に入って、ずいぶん後になって、集英社の世界文学大事典のフロイトの項目に書こうと思ったが、字数が足りず「影響は遠くチャップリンやヒチコックの映画にまで及んだ」に止めるしかなかった。

その翌年は『七人の侍』である。鉢山中学で卒業生名簿を作るから手伝えという先輩に呼ばれて鈴木理司君と行ったところ、なにがしかの礼金をもらった。早速渋谷に出て道玄坂の満員の映画館で通路に腰をおろして休憩時間入りのあの長編を見た。これまた初見の印象が強く、二回目、三回目はとてもそれに及ばない。また学校帰りには恵比寿で布田寛二君と一緒に『人生劇場』の飛車角だの高田浩吉の『伊豆の佐太郎』だのも見ている。とても受験勉強などに集中出来やしない。

## コレオグラファー開眼

あるとき角南泉君が「自分はミュージカルの振り付け師になりたい」と言ったので、びっくりするばかりで全く理解できなかった。当時級友のほとんどが見ていた『略奪された七人の花嫁』を私ひとり見損なっていたのだ。大分後に見てなるほどこれだったのかと合点がいく。

その振り付けでは後にチャキリスの『ウェストサイド・ストーリー』の初来日の舞台を見てからすっかり魅了されて、その後は博多で『キャッツ』を観て虜になり、『コーラスライン』はじめ劇団四季を追っかけて、終いには新宿厚生年金会館だったかでジェローム・ロビンズのアンソロジー

まで見るに至った。コレオグラファーのアンソロジーも珍しいだろうが、一方ではシナリオライターが後れを取った感もないわけではない。『キャッツ』に至ってはアンドリュー・ロイド・ウェバーの音楽と振付師ジリアン・リンだけで足りていて、シェイクスピアも近松も出番がない。

なおロビンズが振り付けた『屋根の上のバイオリン弾き』は自著の書き出しに用いたから、鈍才の仕事というものが高校時代に始まって八十路を越えてようやく完成しようという、如何に遅々たるものかがばれてしまう。

歌舞伎では猿之助の『はじめみじ伊達の十役』の昼の部を観て、そのあと通路の補助席で夜の部まで観てしまった。以来『小栗判官』はじめ猿之助歌舞伎はよく行った。京劇との合作も観て、歌舞伎では弁慶の飛び六方でさえすべて順手順足なのに対して京劇では逆手逆足まで多く用いられているのを発見して面白かった。早稲田独文の特論講義を後任の日本オペレッタ協会会長の寺崎裕則氏に引き継いだ会食の席上で、私がこれを仕方話で伝えると寺崎さんは面白がってくれて、オペレッタ、ミュージカル、歌舞伎を問わず、およそ舞台芸術は観客の気が行くものでなければいけないという私の持論にも賛意を表してくださった。

### 武智鉄二の演出

演出ではまた、浅井真男先生が武智鉄二を高く評価されて、自宅に招いて逗子の中華料理店出張調理させたこともあった。そのため有楽町朝日ホールのこけら落としで谷崎潤一郎の『恐怖時代』に先生のお供として招かれたが、一回限りの上演だから、耳の遠い鴈治郎に黒子が台詞を伝える声が全部客席に聞こえ、血糊をふんだんに使った演出に、登場した役者が驚いて声が出なくなるなど実に破天荒の芝居になった。

一つ印象に残ったのが、毒を盛った女と盛られた男が顔を見合わせて「うんうん」と頷き合うシーンで、これが武智演出の神髄だったろう。後に蜷川幸雄の演出で浅丘ルリ子の舞台を観たが、この頷き合いのシーンはなかったし、血糊も抽象的な表現に和らげられていたように思う。

ちなみに角南君は名簿でみると、東大理学部に進んでいる。なるほど、東大に振り付けを教える学部はない。

### 塚原君と正法眼蔵

早熟で頑健に見えた塚原君が病んだとき、見舞い状を出したら、立派な筆跡の書状をもらって、今にわかに探せないが、ウォルター・ペイターの『ルネッサンス』と道元の『正法眼蔵』を読んでいると書かれてあり、「自己をはこびて万法を修証するを迷とす、万法すすみて自己を修証するはさとりなり」と、衛藤即應校注の岩波文庫版から引かれていたが、私にはさっぱり分からなかった。

ついでながら言っておくと、現行の水野弥穂子校注本はお奨めできない。「道得」を「どうて」と読ませている。道は言うの意味で「道得」は悟った境地の曰く言いがたい所を何とか言葉で表現することを指す。これを「どうて」と読むならば「体得」「納得」「悟得」も「たいて」「なつて」「ごて」と読まねばなるまい。学得底と見得底も「がくててい」「けんててい」と読むしかない。「道（言）い得テ」の送り仮名「テ」をルビと勘違いしたのではないだろうか。三界唯心にある「一句の道著<sup>じや</sup>は一代の拳力なり、一代の拳力は尽力の全拳なり」の道著も道得と同じで、これが仏陀のみならず悟得した者一人一人の仕事であることも理解されていないように見える。

円覚寺の居士林に通うようになって、弘暁打座の快味を知るのは高校卒業後である。

私が会社を辞めて、ユングの『空飛ぶ円盤』を五か月で訳し、クーラーもない二階の書斎で解説を書きあぐねていた時、ふと塚原君なら何か助言してくれるのではないかと考えた。すると板張りの壁面が一斉にパチパチと音を立てた。いうところのラップ音だったのだろう。私は個体の靈魂の永続などは意味がないから信じないが、死後数年は身体を離れた靈魂があってもおかしくないと考えるのはひとえにこの時の経験による。已成君没後六年のことだった。後に小堀鷗一郎さんの「塚原已成君の思い出」を『城北会誌』で読んで、已成君の後を追うように母上が亡くなられ、次いで父君も亡くなられたことを知った。

これが三十数年に亘る塚原已成君との交友であり、鬱々悶々たるわが青春に走った一条の光りの物語である。